

## □アフター・コロナ／ビフォー・コロナ

京都大学防災研究所

教授 矢守 克也

本稿では、今年、コロナ禍で迎えた豪雨や台風災害が、防災・減災学に語りかけていると筆者が考えるポイントを2点記す。最初のポイント（1～3節）は災害時の避難所に関わる問題であり、一見きわめて実務的な話題である。二つめの「ビフォー・コロナ」（4節）は、それよりはコンセプト的な問題である。ただし、最初にとりあげる避難所に関する実践的な話題も、実は、後から述べる「ビフォー・コロナ」の話と深く結びついている。そこでは、「アフター・コロナ」にあってコロナ禍の災害をどう乗り切るかについて実務的にあれこれ悩むことも大切だが、防災・減災学にとって真に大切な学びは「ビフォー・コロナ」について考えることの方から得られることを示唆する。

## 1 「もともと」大切だったこと

今年（2020年）6月、つまり、7月の九州南部での豪雨災害も、9月初旬の台風10号災害もまだ発生していない時点で、ある災害勉強会がオンライン方式で開催された。テーマは、コロナ禍の災害避難であった。聴講していた筆者は、2人の演者が奇しくも同じ言葉を何度も使うことに気づいた。それは、「もともと」という言葉であった。

最初のトークは、災害時の避難所の「三密対策」が中心だった。もちろん大切なことである。しかし、考えてみれば、夏季は食中毒、熱中症対策など、冬季はインフルエンザ対策など、「避難

所の保健・衛生環境を整えることは、コロナ感染症などなくても、もともと大事なことです」。これが、演者が強調した点であった。誠にもっともな指摘だと感じた。

2つめのトークのキーワードは、「多様な避難」ないし「分散避難」であった。新型コロナウイルス感染症を考慮すれば、自宅や親戚・知人宅など、自治体が開設する避難所以外の場所を避難所として活用することを真剣に検討する必要がある。避難とは災害の難を避けることであって、いわゆる避難所に行くことだけが避難ではないのだから。しかし、これも考えてみれば、もともと重要だと指摘されてきたことで、演者は、国もずいぶん前から災害避難の指針としてこの点を提示していたと強調していた。

ということは、コロナ禍は、少なくとも避難行動や避難所設定・運営の分野に、まったく新しい何かをもたらしたわけではないことになる（そういう要素も皆無ではないだろうが）。もともと我々の前にあったのに、見て見ぬふりしていたことを直視せざるをえなくなっただけのことである。「『未知』なるもののパンデミックは…（中略）…すでにわかっていた『既知』の問題をあぶり出している」（中島，2020，p.289）のだ。そうだとすれば、こうも言える。コロナ禍での避難について考える中で、「これも大事、あれも課題」と浮上してきた問題群は、「三密対策」、「多様な避難」を含め、コロナ禍が過ぎ去ったとしても手放してはいけないのだ。それらは、コロナがあろうがな

かろうが、もともと大事なことから。

## 2 「三密対策」と「スーパーベスト」

上で言及した勉強会からわずか数ヶ月、防災関係者の心配・懸念が現実のものとなった。コロナ禍という悪条件のもとで多くの人びとが避難しなければならない事態が生じたのだ。その主なるものが前述の九州南部の豪雨災害と台風10号による災害だった。そこで起こったことは、すでに多くの読者がご存じの通りである。もちろん、個別具体には数多くの課題があった。しかし、全体としては、これまで「重要だ」、「望ましい」、「要改善だ」と位置づけられながら、必ずしも十分に実現できていなかった数々の対策が実施に移され現実のものになった。大筋ではこのように総括できると思う。

念のために、いくつかの事例を列挙しておこう。まず、従来型の避難所では、「三密対策」として、多くの避難所が受け入れ人数（定員）を絞った。もちろん、それによって、避難所が「満杯になる」という課題も生じた。しかし、「非常時なんだから」と、体育館に詰め込むだけ詰め込んででも致し方ないという旧弊が改善に向けて動き出したことも事実だ。多くの避難所に、パーティション、段ボールベットの搬入・設置された。消毒液の常備、マスク等の配布、頻回の清掃・消毒、そして、受付では、体温測定、健康チェックなども実施された。いずれも、「非常時なんだから」とこれまで疎かになっていたことだ。

熊本県内では、他県からやって来た応援スタッフがコロナに感染していることが判明し問題視されたりもした。しかし、これも裏返せば、これまでは、体調が優れない被災者も、インフルエンザで体調のすぐれない支援者も、ほとんどフリーパスで避難所に入ったりしていたということである。そして、そのことが、避難者の体調の悪化（極端な場合には、災害関連死）を招き、また、風邪や

インフルエンザの蔓延を引き起こしていたのだ。

次に、避難所の設定や避難のタイミングについても、これまでとは異なる、しかも、これまでも有効性が指摘されながら、前向きに模索されてこなかったことがいくつも実現した。その多くは、筆者（NHK, 2020）が、「ベスト」の避難（たとえば、避難指示・勧告などのタイミングで自治体指定の避難所へ）、「セカンドベスト」の避難（たとえば、自宅周辺が浸水してきたタイミングで最後の土壇場の手段として自宅2階へ）と対比させる形で、「スーパーベスト」の避難と呼んできたものである。

具体的には、台風10号接近時、九州各県では、事態の悪化前にホテルや旅館に避難する人が相次いだ。もちろん、すぐに満室になり避難に活用できなかったとか、そもそも経済的にホテルの利用が難しい人もいるとか、いくつか課題は生じた。しかし、声を枯らして呼びかけても実現しなかった「事態の悪化前に避難を」が、－「史上空前の台風です」との情報や報道の効果もあったが－「避難所はコロナが心配なので」、「避難所は定員が少ないと聞いていたので」、ひいては、「コロナでずっと家にいて、たまにはホテルで過ごすのもよいかと思った」といったコロナ由来の理由で、ある意味、あっさり実現してしまったことはきわめて象徴的である。

ほかにも類例はいくらかもある。鹿児島県内の離島では、台風接近の前に、初めて事前の島外集団避難が実施された。7月の豪雨災害の被災地人吉市では、人吉市から熊本市への事前の広域避難が行われた。さらに、民間の商業施設の駐車場がクルマ避難のために事前開放され多くの人々が利用する事例もあった。いずれも、これまでにほとんど例を見ないタイプの「スーパーベスト」の避難である。

### 3 「無意識の革命＝気づいたら改善」

重要なことを再度強調しておこう。以上の経緯は、もともと重要だったこと、長年にわたって懸案だったのに実現できなかったことが、コロナ禍で、苦し紛れにやったことを通して、意図せざる結果として、凶らずも実現されたことを意味している。この種のメカニズムは、むろん、防災・減災の領域に限られることなく、大澤・國分(2020)は、「無意識の革命」と名づけて、その重要性を指摘しているくらいだ。革命という表現が大袈裟に響くのであれば、「気づいたら改善」と呼んでもよい。「気づいたら改善」は、成り行き任せ、運頼みのようで、いかにも頼りない印象を与えるかもしれない。そんな間接的な迂回路を経るのではなく、もっと直接的に正面から問題に取り組むべきだと感じるかもしれない。

しかし、そうではない。「避難所の保健・衛生環境の改善」も、「避難先の多様化」も、「事態が悪化する前に避難を」も、それらに対するストレートな問題提起や改善策の提案がなされながら、もう十数年も積み残されてきた課題である。コロナ禍での避難は、それらの難題にやむにやまれずなされたことを通して一すっきり全部解決されたとはもちろん言えないとしても一風穴を開けたのだ。社会的な困難や課題を克服するための「革命」あるいは「改善」は、課題や困難とストレートに対峙・対決するよりも、「無意識の革命＝気づいたら改善」という回路を経た方がスムーズになされる場合が、たしかにある。

そして、以上のことは、さらに次のような前向きの想定を招くことになる。たとえば、度重なる高齢者福祉施設の被災と避難上のトラブルに直面して、先般「避難確保計画」を策定することが義務化された。高齢者等の被災が後をたたないことを受けて、要支援者の避難に関する「個別計画」の策定も推進されている。しかしそれにしても、これらのあまりにストレートな対策、うまく進む

のだろうか。仄聞したところでは、「計画倒れ」(計画は立てたが、蓋を開けたら実効的ではなかった)、「計画だけで満足」(義務化されたので、「ひな形」に従ってとにかく計画書だけは作っておきました)、さらに悪くすると「計画づくり倒れ」(施設をとりまく環境や条件が厳しく、満足に計画すら立てられない)が続出しているという。

筆者の見るところ、これらの不具合の遠因は、対策が「直接的に過ぎる」ことにある。課題A(たとえば、健康増進活動)やイベントB(たとえば、お祭)について一所懸命取り組んでいたら、結果として、気づいたら、「避難確保計画」、「要支援者避難個別計画」(と等価なものやそれ以上のもの)ができあがっていた。こういう結果を生むところのAやBを探すことの方が重要かつ早道の場合もあるのではないか。また、一これはあまり望ましい路線とは言えないが一現時点では想像するほかない、別の災厄Xが将来発生し、そのXと格闘する中で、「気づいたら改善」されるという道筋も十分予想される(4節参照)。

### 4 ビフォー・コロナの重要性－「鄧小平の改革前なら…」

世界的に高名な批評家スラヴォイ・ジジェクが、コロナ禍について論じた著書(ジジェク, 2020)の中で、非常に重要なことを指摘している。「鄧小平の改革以前にこれが起こっていたら、その話を耳にすることすらなかったのではないだろうか」(同書 p.47)。

仮に、今、私たちが新型コロナウイルスと呼んでいるウイルスが、それまでの棲み処から離れて人類とファースト・コンタクトをもってしまったとしても、その彼(女)の生活圏が局所的に限定されていれば(今日のような「グローバル社会」が成立していなければ)、さらに加えて、世界中の出来事が直ちにすべて耳に届くような情報化社会が成立していなければ、私たちは、新型コロナ

ウイルス（が、とある国の、とある集落で感染症を引き起こしている事実）を知る由もなかっただろう。そして、それが世界的に蔓延することもなかっただろう。逆に言えば、そのように局地的な感染を引き起こすのみでどこかに消えていったウイルスも、かつて無数に存在したはずだ。

この種の思考実験は、一見、「そんな仮定法は虚しい繰り返りに過ぎない」と思える。しかし、そうではなく、いくつもの重要な示唆を含んでいる。もっとも大切なことは、今、私たちは、「アフター・コロナ」、「ウィズ・コロナ」と騒いでいるが、本当に大事なことは、「ビフォー・コロナ」、「プレ・コロナ」の方に隠れている、ということである。今はたしかに「アフター・コロナ」であり「ウィズ・コロナ」であるが、同時に、今は、現時点ではまだ耳にすることすらない何か（X）に対する「ビフォーX」や「プレX」に、すでになっているはずである。「アフター・コロナをどう生きようか?」、「ウィズ・コロナ時代の防災・減災は?」と思い悩み立ち向かうことはむしろ大事なことである。しかし、真に「コロナに学ぶ」とは、本来、「ビフォー・コロナ」において、私たちが何をし損ねたのか、何をどう見誤ったのかについて問い直すことである。その作業こそが、今どこかに、すでに存在している次の潜在的な脅威、つまり、上述の何か（X）に対して賢く備え、コロナの二の舞を避けることにつながるからである。

ここまで論じてくれば、ここでの指摘と3節までの議論との接点も明確だと思う。3節までに論

じた避難所における「もともと」問題と「気づいたら改善」戦略も、ここで論じていることの変奏曲である。「ビフォー・コロナ」の時代から、陰に陽にそこにあった問題（避難所の保健・衛生環境問題など）が、「ウィズ・コロナ」においてだれの目にも明瞭で切実な課題として顕在化した。そして、やむにやまれずとった苦肉の策が、積年の問題を解決するためのきっかけやブレークスルーとなった。だから、それらは「コロナとともに去りぬ」であってはならず、「アフター・コロナ」へと引き継がれねばならない。

と同時に、まだ見ぬ次の脅威Xと、そのXによる「気づいたら改善」が見込まれる課題が今周囲にないか—こういう方向で私たちは想像力を働かせ、思考し、実践する必要がある。これが、「ビフォー・コロナ」の視角から防災・減災について考えるということの意味である。

#### （引用文献）

- 中島隆博（2020）パンデミック・デモクラシー（筑摩書房編集部（編）「コロナ後の世界：いま、この地点から考える」）筑摩書房 pp.273-296
- NHK（2020）「豪雨災害から身を守るために」（視点・論点）  
<https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/433556.html>
- 大澤真幸・國分功一郎（2020）コロナ時代の哲学 THINKING-O, 16号 左右社
- ジジック, S. (2020) パンデミック：世界をゆるがした新型コロナウイルス（斎藤幸平（監修・解説）；中林敦子（訳））P ヴァイン